

## 俱舍論における中間定解釈

吉 瀬 勝

### 一

仏陀は涅槃を理想とされて種々なる修習の道法を説いたのである。無常・苦・無我の觀察・四諦の三転十二行相の観法とか、或は四念処・四正勤・四如意足・五根・五力・七覚支・八聖道の所謂、三十七菩提分、或は四梵住の如きを説き、その中核として説かれたのが、禪定なのである。禪定は無明、渴愛を滅して、差別動乱を離れ、それによって無漏智を了得し、絶対無の大機大用に働き出したのである。

特に仏教に於ては、戒・定・慧の三学を説き、戒によりて定あり、定によりて慧ありとして説き、三者が共に相依相待の關係に於て成りたつとし、定と慧との關係を法句經<sup>(1)</sup>では、次の如く述べている。

「智慧なきものに禪定なく、禪定なきものに智慧なし、禪定と智慧を有するものは涅槃に近づけるなり」

禪定三昧は智慧をうるための三昧でなくて、聖者の生活が

常に差別動乱の生活を越えた寂靜で充実したものであることを示すのであり、現法樂住として示されている。故に仏教の実踐道の基本的様態は、「仏教真理の自覺とその生活への具現」という形であらわされているのであり、元になるのは、禪定である。

### 二

禪定という言葉は俱舍論では、靜慮(dhyana)として説かれており、靜慮は善なる心の一境性(Kusala-Cittakagrata)であり、三摩地(Samadhi)がその自性であるとし、「一境性は一所緣性(ekalanidhanata)なりとし、心そのものが三摩地ではなくそれによって心が一つの対象に作用する法が三摩地なりとして理解しており、靜慮の本質的なものが三摩地であるとして一応分けて考えられているのである。Ak<sup>(2)</sup>Bhに於ては、

「最勝なるものとは何であるか、三摩地は支(angga)を有するものであり、それは実に止(gamatha)と觀(Vipacyana)との二

つを転につないでいくから現法樂住である」

と説かれており、三摩地はその要素なる十八支に分離して考え、三摩地の深まっていく段階に応じて分けて考えられている。

また、Akṣh<sup>(4)</sup>には

「静慮とは、如何なる意味であるか、修行者がそれによって禅思するものであり、了知するという義である。定に入った心は如実に了知するからである。その禅思するという語根は審慮(Cintana)の意味を持つ。この宗の審慮するものは慧(Pañña)である。」と説かれており、定に入った心は如実に了知し、それが即慧と結びついており、これは原始仏教以来の伝統を受け継いでいるものと思われるのである。

静慮に対する分類は、四禪、四無色なる根本等至とそれより生ずる功德として、四無量、八解脱、八勝处、十徧处、と二つに分けられている。有部では、直線的段階的に九次第定として、禅定の心的経過の段階的深まりと禅定心そのものの相違を説いていると思われる。

初静慮は未至定(anāgāmya)と根本定に分けられ、後第二静慮より非相非々想処までは近分定と根本定に分けられている。静慮は生静慮(upapatti-dhyāna)と定静慮(Samāpatti-dhyāna)とに分けられ、生静慮は色界に於いて静慮は各々三地を有するが、第四静慮のみは八地を有するとし、定静慮は

俱舍論における中間定解釈(吉 瀬)

善の一境性であり、それが初静慮より第四静慮へと四禅定として説かれているのである。

Akṣh<sup>(6)</sup>で説かれる四禅定を次に挙げてみると、

初静慮〜尋(Vīṛarka) 伺(Vīcāra) 喜(Pīṭi) 樂(Sukha)

心一境性(Cittakaggratā)

第二静慮〜内等淨(adyātama-samprasāda) 喜 樂 心一境性

第三静慮〜捨(Upekṣa) 念(Smṛti) 正慧(Samprajñāna)

樂 等持(Samādhi)

第四静慮〜不苦不樂受(adukkhasukhavedanā) 行捨清淨

(Upekṣā-Parisuddhi) 念清淨(Smṛti-parisuddhi) 等持

(Samādhi)

以上の如くであり、静慮のみが支(aṅga)を持ち、無色定は支を持っていないのである。欲界と初静慮の根本定は有尋有伺、初静慮より第二静慮の間に中間定(dhyānanantara)をもうけ、これは無尋唯伺、初静慮より第四静慮までは無尋無伺である。ここで尋と伺についての定義をパーリ仏教で見つみると、清淨道論では、

一、諸欲をば離れ諸不善法を離れ、尋あり伺あり、離より生ぜる喜と樂とある初禪を具足して住す、

とあげた後に一々の言葉について説明解釈している。「諸欲をば離れて」で欲界を超越し、欲貪の反対なるが故にこの禪は諸欲の出離であり、五蓋を捨断することにより尋と伺と

が有り、尋(Viñāka)とは所縁に対しての心の攀着すること、思考することである。伺(Viñā)とは所縁を引続き思惟することを相とすること、熟考することであるとし、その次に例を挙げて説いている。

「例えば、鐘を打つが如く、心が最初に対象に集中することが尋なり。細の義と引続き思惟する性質とによりて、(例えば)鐘の余韻の如く(心が思考を)継続することが伺なり」

尋と伺とが離れて説かれるべきでなく、尋はまだ粗い心作用であり、伺は細かい心作用であることを示している。

AkBh<sup>(6a)</sup>に於ても同様に、

「尋と伺とは煙と火の如く共にあるものであり、喜と樂をともなう伺は尋なしには存在しないからである。」

喜支については、有部では、喜は喜受と同一視する。

樂支については、有部では、初静慮・第二静慮の樂支を大善地法中の輕安(Prasādi)であるとし、二つの定静慮には樂根がないからであると解釈して、行蘊の所撰とするが、これは樂を身心受と解し、定中に五識がないからであり二受俱行を許さないからである。

第三静慮の樂は樂受であり、大地法中の身心受の樂受とし、受蘊に撰せしめる。

内等淨支(ādhyātma-samprāsada)は第二禪に出ている。

「内等淨という法は何か、尋伺の動きを離れて、相続が静寂にな

ったことが、内等淨である。尋伺の動きのある相続は波立つ河のように静寂ではない」

修行者が尋伺を離れた第二静慮を得ることにより、定地を離れることに對して、しっかりした確信が生ずることなのである。

第三禪では、捨あり念あり正知ありと説かれている。第四禪の捨支は如何なるかというに、「捨念清淨」と一般的に言われているが、AkBh<sup>(6b)</sup>では捨清淨(upaśama-pariuddhi)と念清淨(Smṛiti-pariuddhi)はcaと言言葉により分けられて理解されている。

以上の如く有部では、對照的、平行的に区分して考えられていたのである。

### 三

前述の如く、俱舍論で説かれる四禪定各々については説明を終えたが、ここで問題になるのは中間定に關してである。

欲界と初静慮の根本定は有尋有伺、初静慮より第二静慮の間に中間定を設け、無尋唯伺、初静慮より第四静慮までは色界に屬し、第二静慮より第四静慮までは、無尋無伺である。

此の内、近分定とは、予備的禪定であり、根本定とは、各段階の根本的特質を發揮することである。初禪と二禪との間に中間定、静慮中間と呼ばれる禪定がある。これは初禪と第二



/ bsam gran dan poi dnos gshi khyad par can kyī yi la sogs pa de dag ni rim pa lhar bsam gran dan poi dnos gshi tsam popi rrog pa dan / bsam gran dan poi dnos gshi khyad par can khyi yid la sogs pa de dag ni rim pa lhar bsam gran dan poi dnos gshi tsam po pi rrog pa gñis pa med cin gross su dpyod pa ñes par lhan la / khyad par can rrog pa spañs shin dpyod pa ñes par yod pas rrog med dpyod tsam dan (p. 57. 11. 12~19)

欲界と第一静慮の中間定の尋と第一静慮の中間定の意等などには次第の如く、第一静慮の根本定の第二の尋はなく、友達として伺が決定的にある。中間静慮は尋を断じて伺は決定的にあるから無尋唯伺である。

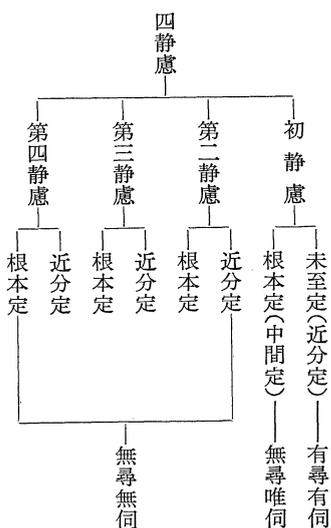
ここに於ても中間定は第一静慮にあって俱舍論で説かれる根本定と同じものであると考えていたのである。第一静慮の根本定が中間定と同じものであり、無尋唯伺であると理解していた。別の個所にもそのように理解されているところがあるので掲げてみると、

dnos gshi khyad par can de gan she na / rrog pa me cin dpyod pa tsam gyi dnos gshi ni bsam gran khyad par can yin no / (p. 378. 1. 16~17)

根本定を中間定とは何であるか、尋なく伺のみの根本定は中間定である。

ここでも中間定と根本定は同じものであると見ていた。以

上のことを図示してみよう。



となつてゐるが、チベットでは無尋唯伺を中間定であると定義し、その定に於ては無漏と淨と煩惱の三つとも持つており、樂でもなく苦でもない愛と捨とに相應するのであって、努力によつて完成する道であると、また、それを修習することによつて大梵に生ずると説かれている。これは、先きに説いた伝統的アビダルマ解釈と一致しているのに、中間定に関しては異なつた理解を示していることが分つた。

1 dhammapada 372.

2 舟橋一哉博士「原始仏教思想の研究」一二六頁参照。

3 abhidharmakośabhāṣya ed. by pradhan p. 433. yāsonitra, abhidharmakośa vyākhyā p. 664.

[sa hyaṅga-samāyuktāḥ samādhiḥ śamatha vipāśyanābhyāṃ yuga-naddhābhyām ivāsvābhyāṅ ratho vahatīri yuga-naddha-

vāhi]

「その支分を有する三摩地は止と觀等の軛につながれた二頭の馬車が行く如く軛につながれて行くなり」と註釈してゐる。

4 abhidharma kośabhāṣya ed. by pradhan p. 433.

5 花園大学研究紀要第四号拙稿「八等至について」参照。

6 abhidharma kośabhāṣya ed. by pradhan p. 437.

7 Visuddhi magga p. 139.

8 Visuddhi magga p. 142.

9 abhidharma kośabhāṣya ed. by pradhan p. 433. Yaśomitra, abhidharmakośa vyākhyā p. 665.

「dhūmāgniivad iti. yathā dhūmo'trēti dhūma-vacanenaṅgiri apy ukto bhavati sahacaryāt」

「煙と火の如くであるとは、例えばこの煙があることにより、そこに煙とらう言葉によりて火も又ともに存在するなりと説かれる如くである」と註釈してゐる。

10 abhidharma kośabhāṣya ed. by pradhan p. 440.

11 abhidharma kośabhāṣya ed. by pradhan p. 438.

「adukhāsaukhā Vedanā upekṣāparicuddhiḥ smṛtiparicuddhiḥ samādhiceca」

影印北京版大藏經 271-6-5.

「Bhāṅsoms yoṅs su tag pa tan tian pa yons su tag pa tan timie dsin yoṅ su tag paṅ」

「捨清淨と念清淨と等持清淨である」

12 Mdsod tik thar langsal byed byrgyal ba dge hdun glubā, Varanasi, 1973年発行。  
(花園大学職員)

俱舍論における中間定解釈(吉瀬)

## 会員資格に関する内規

一、会員は原則として新制大学又は短期大学卒業以上、あるいはそれに相当する学力を有する者とする。入会に当っては学会役員(理事又は評議員)一名の推薦を得た上、理事会の承認を必要とする。

二、学術大会における発表資格者は、原則として新制大学院修士課程修了以上、又はそれに相当する学力を有する者とする。

三、会費を三年間滞納した者は退会したものと認める。又、会の名誉を著しく害なう等会員として不適當と認められる者については、理事会の決定により除名することができらる。